

巻 頭 言

「研究と教養」

Research and Cultivation

大阪医科大学看護学部 准教授 小林 道太郎

Michitaro Kobayashi

日本の学術研究一般に関わる最近の（特に「3.11以後」の）話題は大きく言って二つあるように思われます。ひとつは、主に科学技術をめぐる研究者の倫理および社会的責任、もうひとつは超高齢化と人口減という社会構造の変化とそれに向けた対応です。これらはいずれも複雑な問題ですが、多くの研究者に「何をどのように研究すべきか」という問いを（濃淡の違いはあれ）投げかけているものと見る事ができるでしょう。そしてそうである以上、これらは広い意味での「教養」というものと決して無関係ではないと思われます。今こそまさに研究者に教養が求められる時代ではないかと私は考えています。

まず、上の話題の各々について、教養と関係すると思われる側面をもう少し特定しておきます。

研究者が不正をしないということは当然のこととしてより強く求められるようになっていますが、それだけではなく、それは「よい研究」、「価値のある研究」なのかということが問われています。ここでいう研究の価値は、その特定分野内の現在の動向だけで決まるものではありません。また必ずしもその成果の直接的な有用性だけによって測られるものとも限りません。社会的な要請やより長期的な変化、広い意味での人類の福祉、学問・文化の発展、真理の探究等との関わりを考えることが可能であり、また必要でもあります。これを見失ったとき、倫理にもとる研究が行われたり、あるいは研究者の偏った視点を（たとえば「御用学者」等と）批判されたりするようなことが起こり得ます。

社会の変化ということに関しては、これまでに誰も経験したことのない社会状況、実践の諸条件が発生します。特に医療福祉介護に関しては地域包括ケアシステムの構築が目指されており、実践の場面も求められる対応もさらに多様化することが予想されます。特定の観点や領域だけで見通したりコントロールしたりすることが難しいような事象を扱うことが、今まで以上に必要になってくるでしょう。こうした中では、既存の学問領域に縛られない新しい発想や、学際化、分野連携が重要になります。

では、これらに関わる教養とはどのようなものでしょうか。教養という語にはさまざまに定義されており、またその用法やニュアンスも多様なのですが、ここでは、教養は単なる知識やその量ではなく、広い意味で知ること・学ぶことを通じた自己のcultivationであると考えます。現代においては、教養というときしばしば連想される人文学の古典などは、必ずしも（かつてのような）特権的な地位を占めるわけではないでしょう。多様な知識が教養の一部となり得ます。しかし研究者であれば自分野のことだけを見ていればよいというのではなく、より広い視野と知的な誠実さが求められます。

加藤（2015）は、西洋の教養論に古代ギリシア以来の二つの系譜があることを論じています。その系譜のひとつは、プラトンに由来するもので、「キリスト教と融合し、超越性

と内面性を重視する伝統」(p.66-7)であり、その特徴は「超越性」「人間の尊厳」「真の自己への帰還」「科学と批判的精神」「道徳教育における芸術の重視」(p.71)であるとされます。もうひとつは、言葉とレトリックを重視したイソクラテスから「キケロを通じてルネサンス・ヒューマニズムに継承され、公共性とコミュニケーションを重視する伝統」(p.67)で、その特徴は、「公共性」「鋭敏な言語感覚」「複眼的なものの見方」(p.71-4)であるとされます。要は、教養には、真理や「真の価値」を目指す方向性と、公共性と多様性を重視する考え方との両面があるということでしょう。著者は、この両者は排他的なものではなく互いに相補的なものであると述べています。

この二つの系譜を踏まえてみると、上に見た現在の学問状況と教養の関連はより理解しやすいものとなります。私なりに教養というものの意味をまとめてみると、次のようになります。

・教養は、趣味あるいは判断力の形成です。すなわち、正しいことを行い不正を避けるという狭い意味での倫理だけでなく、何が価値あるものなのか、あるいは逆に何が偽物なのか、を評価する際のその判断力をよりよいものとする、つまり〈よりよい価値判断の能力〉が問題です。これは、翻って自分（たち）が「いかに生きるべきか」、「何をなすべきか」という問題に直結しています。研究は、学界の中で評価されるだけでなく、社会の中の実践としても評価されるのですから、私たちは、その意味でどのような方向の研究がよいもの、望ましいものであるのか、を考え、各自の責任で判断しなくてはなりません。

・教養は、私たちに多角的なものの見方の可能性を教えてくれます。このことは、自分の見方を相対化すること、自分とは違う他者の見方を理解すること、さらに別の可能性を探ること、に対する準備性（readiness）を形作ることになるでしょう。これらのことは、変化する複雑な状況の中での研究や他分野との協働のために、きわめて重要なことです。

これらは必ずしも容易に身につくものではなく、また目に見えやすいものでもありません。たとえば、この公式をひとつ覚えておけばすぐ役立つ、というような仕方で行えるようなものではないのです。この困難さが、教養の意義を見えにくくしている理由のひとつかもしれません。昨今の大学をめぐる諸状況の中では、人文系を含めた教養の軽視・放棄につながりかねない傾向もあるように感じられます。しかしそうしたときにこそ、あらためてその意義を論じ、またさらに、どのようにしてそれが獲得されるのかを問わなくてはならないのだと思います。

文献

加藤守通（2015）：教養論の二つの系譜—パイディアとレトリック・ヒューマニズム，哲学，66，65-82.